

## 今月のメッセージ（2012年7月）

日本銀行富山事務所長  
佐子 裕厚

白エビ丼一杯 12 ユーロ也

6月17日のギリシャの総選挙（再選挙）の結果、「ギリシャのユーロ離脱」という危機はひとまず遠のいたようです。ただ、南欧各国の経済危機は解決しておらず、欧州の動向から目が離せない状況が続きます。

「ギリシャのユーロ離脱」に関する報道に接する度に、1993年から95年に赴任していたロシアのことを思い出します。当時のロシアは、ソ連邦という社会体制が崩壊した直後で、インフレは昂進し、失業率も高く、生産はガタ落ち、・・・という状況でした。ロシアの通貨はルーブルですが、ロシアの人々でさえルーブルの価値を信用せず、ドルでしか物を買わない「外貨専門店」が街に溢れ、ルーブルでお給料を貰っても直ぐにドルに両替して貯金していました（銀行が信用できないので、ドル紙幣をタンス預金にするのです）。

経済学では、通貨の機能として、価値尺度（物の値段を表示する機能）、交換手段（物の売買をする際の対価としての機能）、価値保蔵手段（将来の物の購入に備えて貯めておく手段としての機能）の3つを挙げています。そして、これらの機能は、通貨価値が安定していることを前提としています。

ギリシャがユーロから離脱した場合、ギリシャは新たな通貨（ドラクマ？）を発行することとなります。ドラクマは通貨の機能を果たせるのでしょうか。

特に、最近の預金流出の結果として、ギリシャ国民の多くが大量のユーロ紙幣を保有している中であっては、ドラクマでなくユーロが、実質上の通貨としての役割を果たし続けるように思います。こうした事態に対して法律で外貨の使用を禁止してもあまり効果はなく、ヤミ経済を肥大化させるだけです。

自国の通貨の価値を信じられない社会がいかに悲しいものか、皆さんには想像できるでしょうか。例えば、食堂に入って、「白エビ丼一杯 12 ユーロ也」とか、「ホタルイカの沖漬 6 ユーロ也」といったメニューをご覧になった時の気持ちを考えてみて下さい。

ユーロに残るにせよ、ユーロから離脱するにせよ、結局は、国民の地道な努力で危機を乗り切るしかないように思います。

以上